

# 陰気な女王

—The Dark Queen—



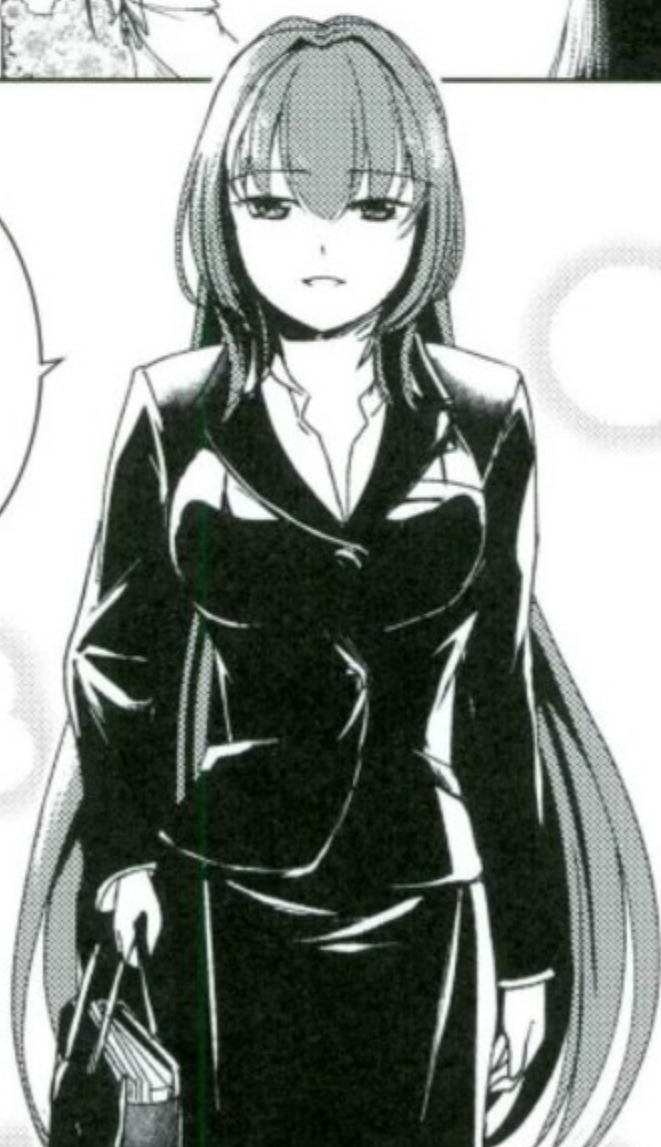


私を殺して欲しかった





久しぶり





今は  
花屋なのか



あ  
ああ



これは  
バイトで…



私は  
体育の講師を  
しているんだ

今年の春から  
中学校でな  
お前が私の元に  
訪れたのと  
同じくらい  
歳の子どもたちだ



皆  
軟弱者ばかりで

つまらぬよ

…あ







秋だし!

あー それは  
この時期だと  
取り寄せに  
なります

そうか…

以前 鉢で育てていた  
ことがあってな

次の年もまた  
大輪の花が見られると  
思っていたのに

いつでも良いので  
また入荷したら  
教えて欲しい

たまたま人に  
貸してしまって  
枯れてしまったんだ

あのとときは  
とても  
惜しいことをし

次こそは  
きつと手放さない  
ようにするから





手配しておきます  
日にちがわかり次第  
連絡しますよ



連絡先を覚えて  
頂けますか



ありがとう



番号は…







じゃあ...  
じゃあ...



連絡お待ちして  
おります

はい



やられた...



カサ



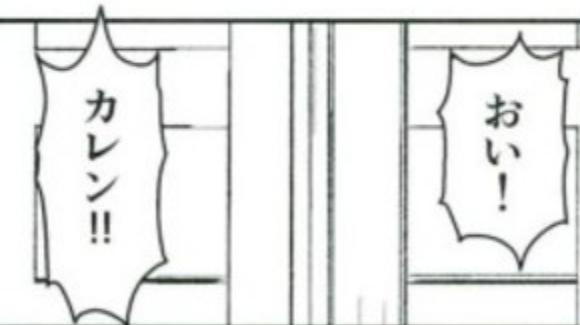
# 陰気な女王

————— The Dark Queen

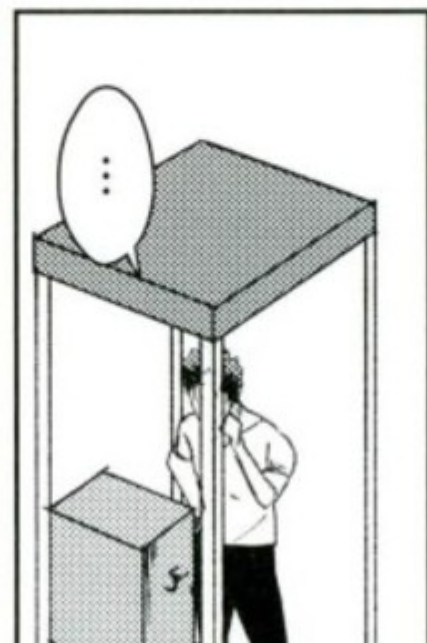














いや  
花のことじゃ  
なくて…

フフッ  
どうかしたのか

思ったよりも  
早く入荷した  
ようだ

子犬みたいに  
雨の中  
凍えているのか？

雨降ってねえし…

心が泣いている  
のかと思った

違えよ

用がないなら  
切る

あっ  
待って…








ガ  
マン  
シ  
ン  
フ







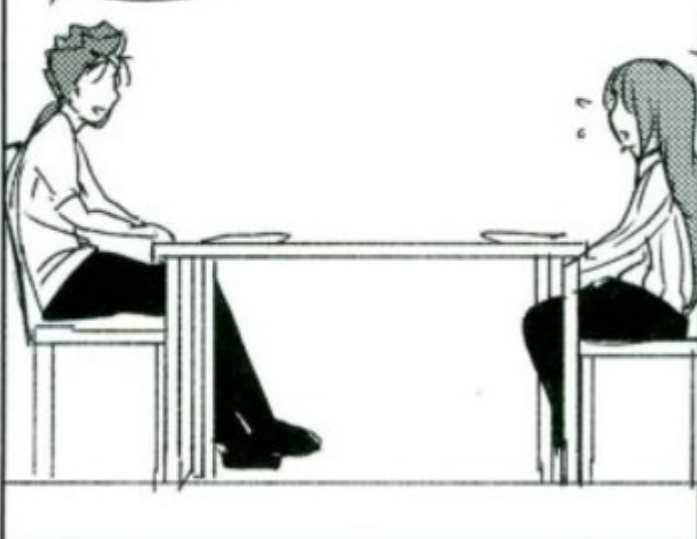
おごで

お邪魔します



そうだな  
デリバリーで  
すまない  
私もやるときは  
やるのだが

気にしてねえよ  
女王様だからな  
食事の支度は  
炊事係の仕事だろ

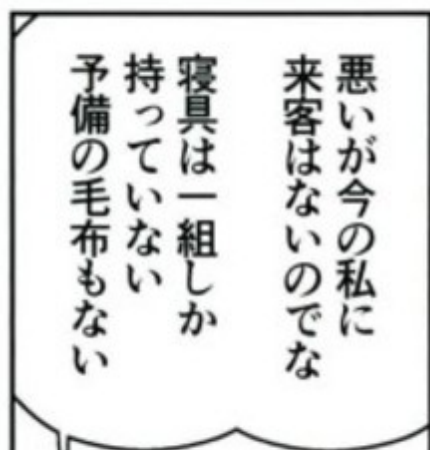


ん？  
もしかし

あいや…

こうやって一緒に  
食事することって  
あんまりなかった  
よな〜って…







じゃあなんで  
入れたんだよ



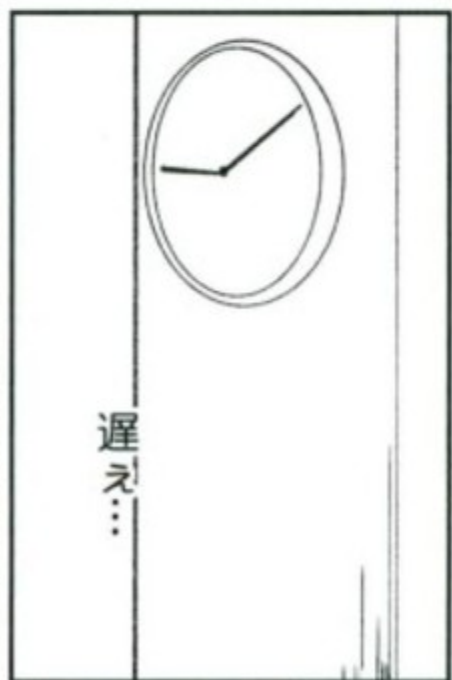




バクン

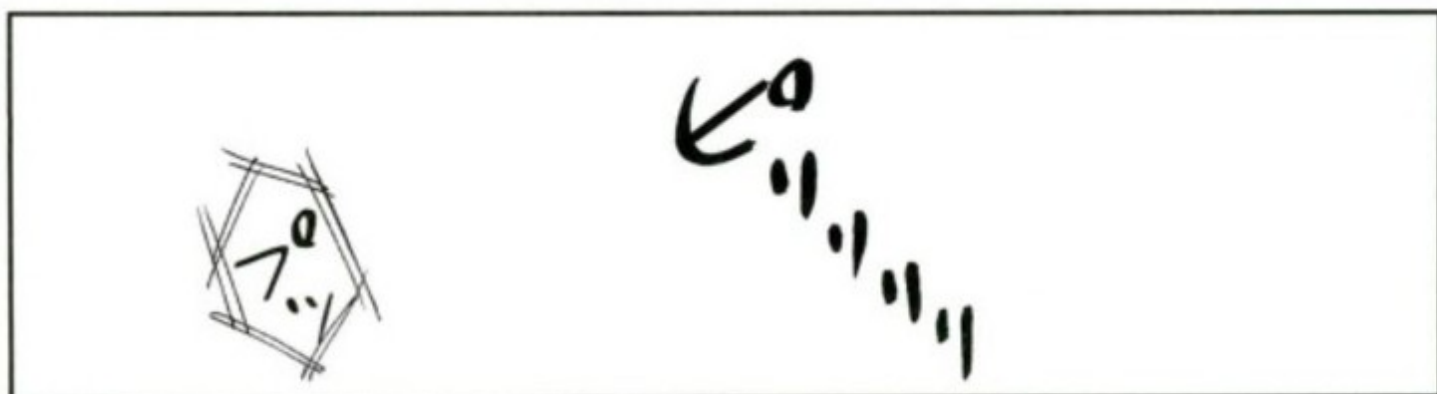
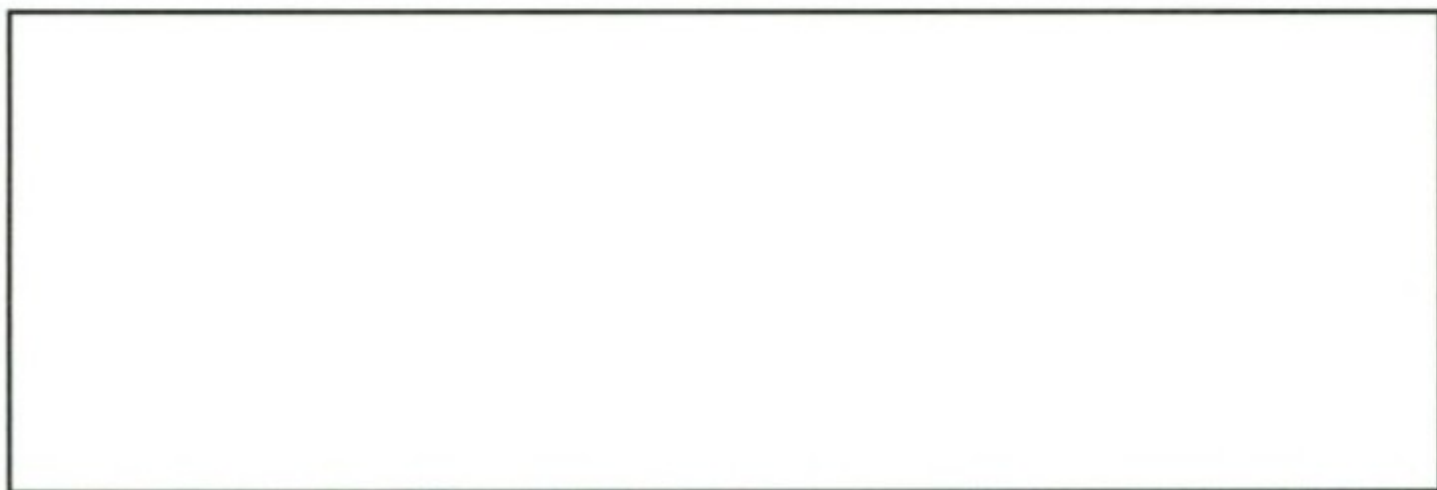


どこまで  
行ってんだ？



遅え…







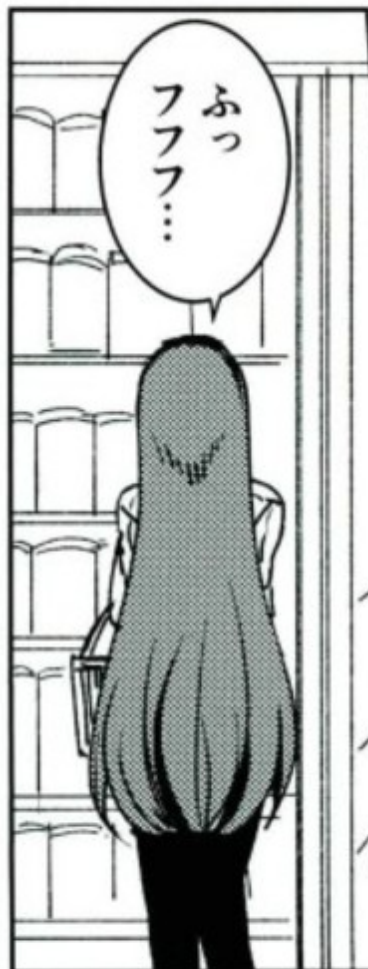




え？



フッ





が  
4  
ヤリ











彼に愛想を振る舞うのは止しなさい



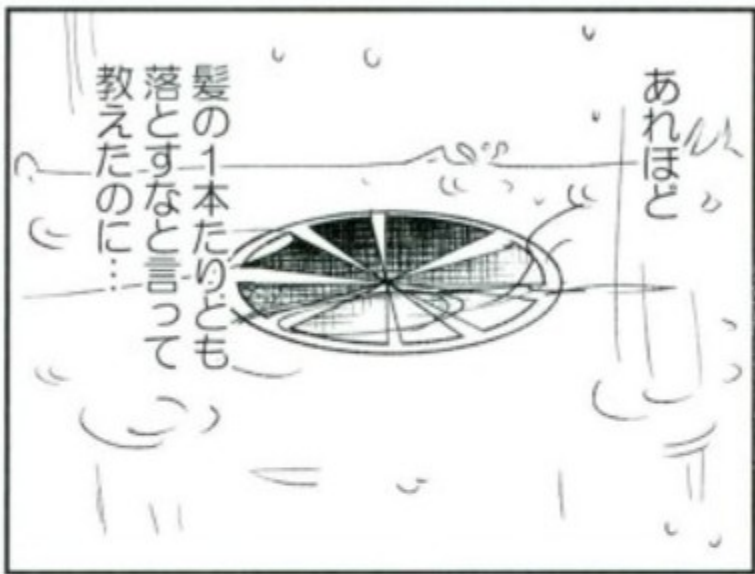
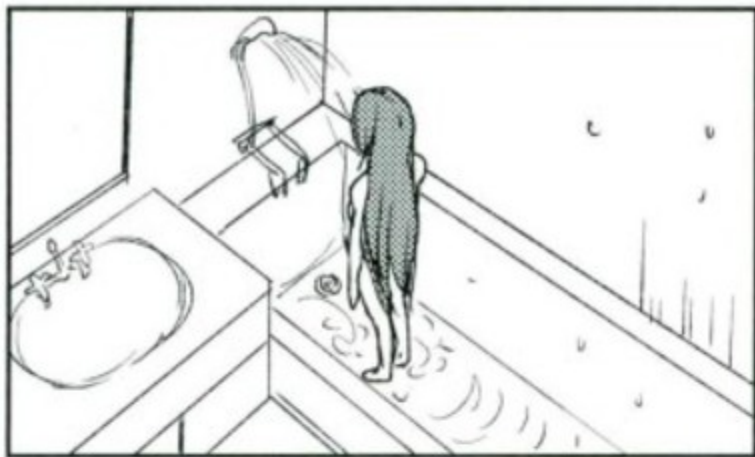
彼女の目についたら



殺される











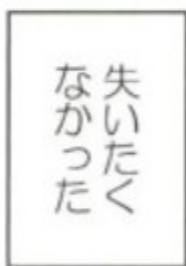




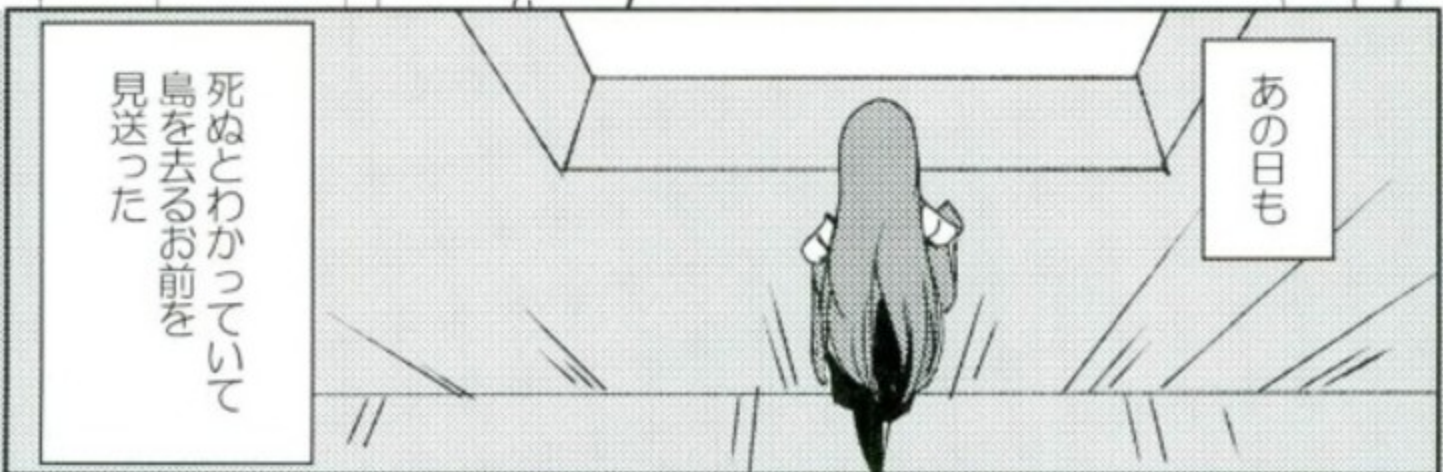
今こじで  
待っている



今こじで  
お前を失いたくない



失いたく  
なかった



あの日も

死ぬとわかっていて  
島を去るお前を  
見送った



今じじじする  
お前も  
いすれ…



わ…私が  
その身に教えた  
槍の使い方

忘れたとは  
言わせんぞ



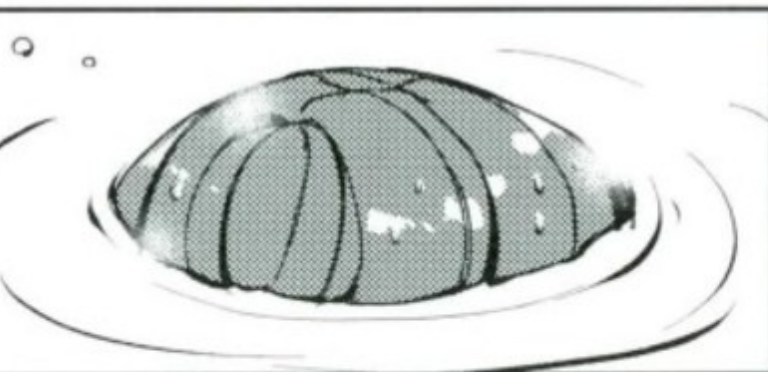
赤面



お…  
お前の上で  
ポールダンスを  
踊ってみたい  
のだ



沈没





おい  
いつまで入って…

わアアア!!

ガラッ

いつまで経っても  
出てこねえから  
来てみたら!

長湯なんて  
慣れてねえだろ

ググー

お…お前が  
外にいるかと  
思うと

いつ出れば  
良いのか  
気恥ずかしく  
なってしまった…

は!?

見見  
見て…

ない!

えーと…  
水!  
氷水注いで

来るから  
待ってる!!

グ  
チ  
ャ  
ア  
ア  
ア





のほせていて  
よかった…







わッ

私の城に  
入った以上

一年と二日経つまで  
出ることは許さぬ

もしそれより早く  
出て行きたい  
のであれば

私を



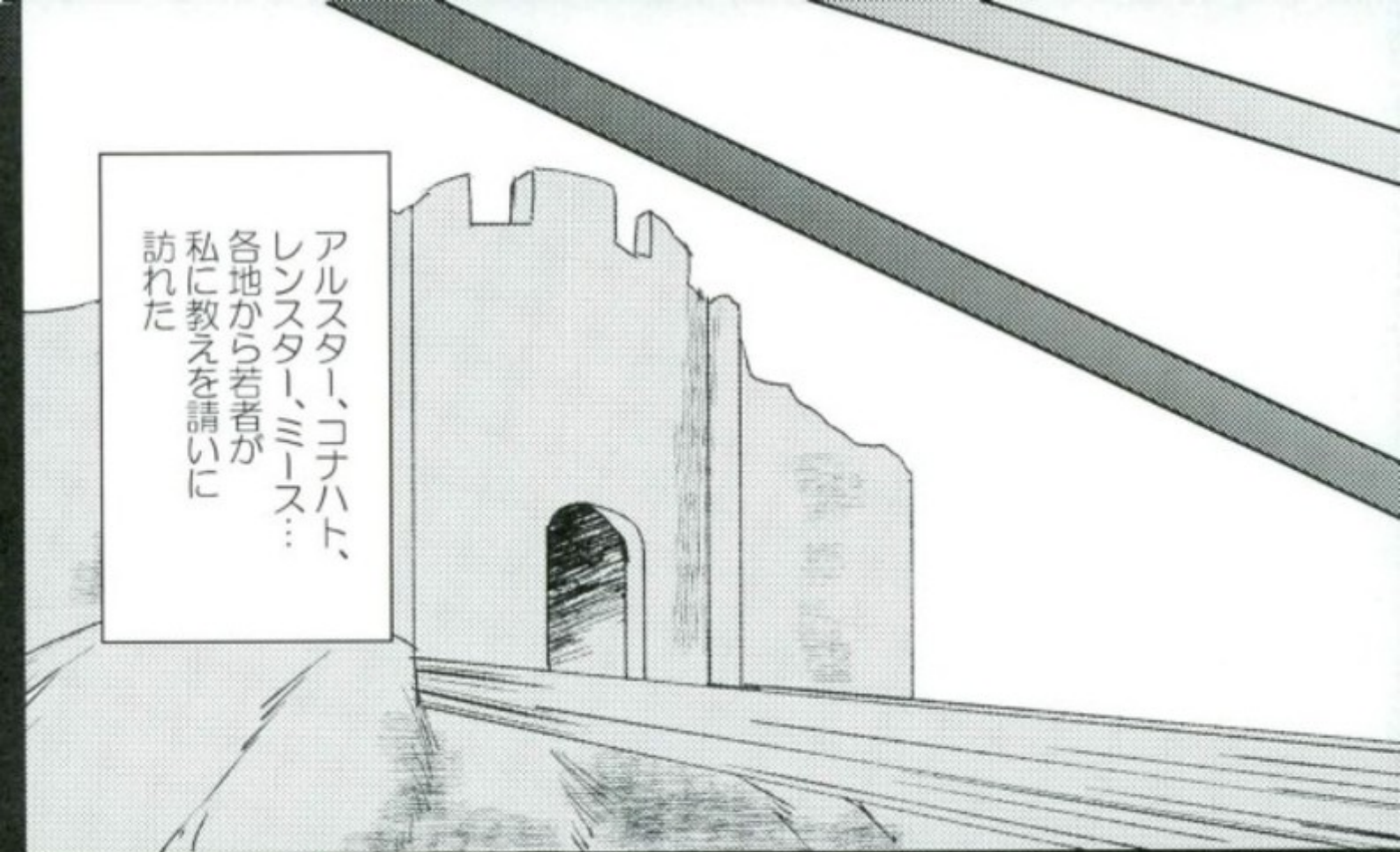
殺せ



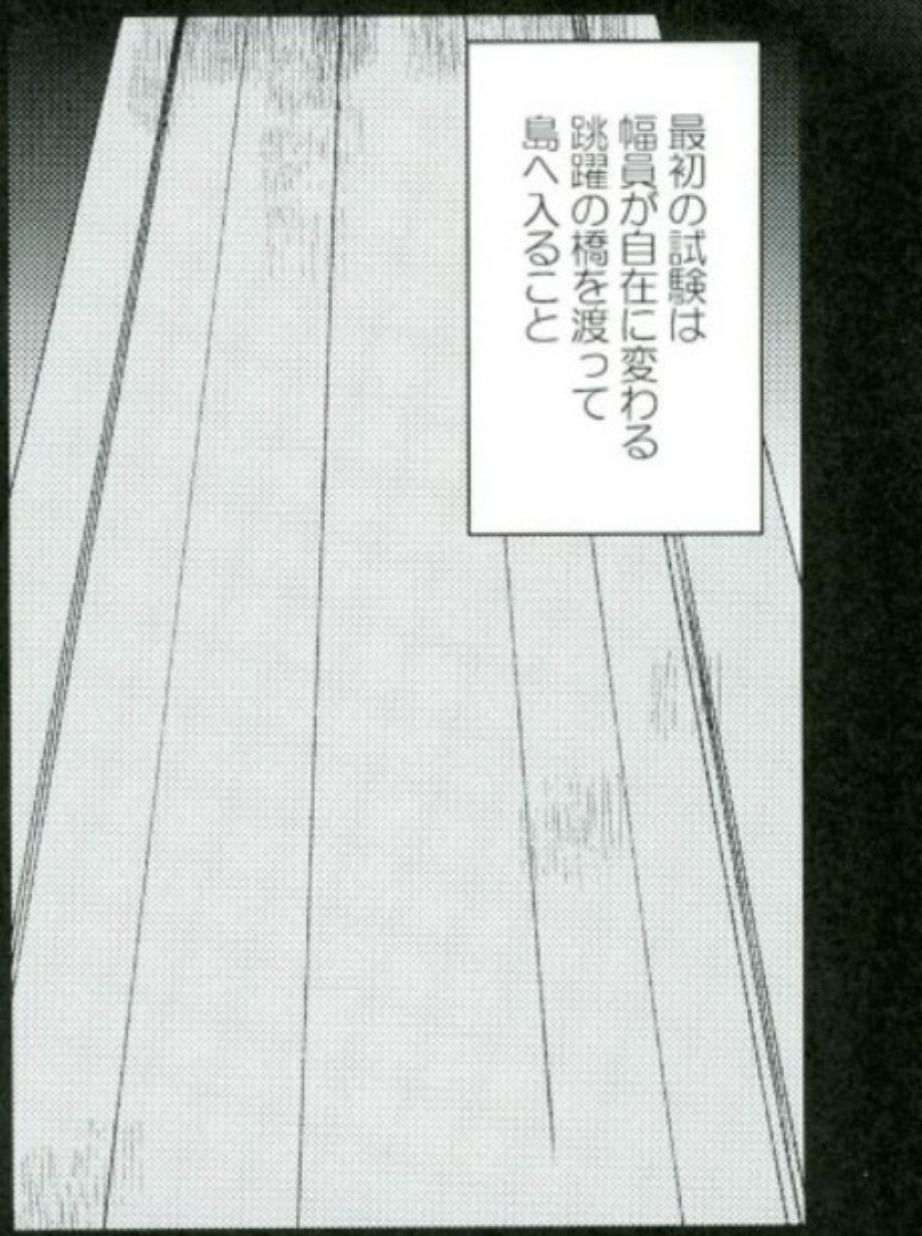
私を…  
殺して欲しかった








アルスター、コナハト、  
レンスター、ミース…  
各地から若者が  
私に教えを請いに  
訪れた



最初の試験は  
幅員が自在に変わる  
跳躍の橋を渡って  
島へ入ること




それすら  
出来ぬ弱者に  
興味はなかった




見込みがなかった






島に入ることすら  
敵わぬ者に

どうして  
私の胸元に  
槍を突き立てる事が  
出来ようか



私は  
私を殺してくれる  
槍が欲しかったのだ



無いのならば  
自分で作るしか  
なかった

それが  
多くの若者を  
指南した理由だ



お前はその中で  
一層光り輝く刃を  
持っていた



研げば必ずや  
私の胸を貫いて  
くれるだろうと  
期待した



だから  
オイフェとの…

姉妹の喧嘩に  
巻き込んで  
むさむさ失いたくは  
なかった

彼女は  
私と同等の武力を  
誇っていた




違っていたのは  
影の国の王としての  
責務がなかったこと

少々色気は無いが  
死ねるのならば  
彼女の手にかかるのも  
また良しと思っていた



だが私を殺す前に  
お前が彼女の手  
落ちることは  
許せなかった







しかし  
血気盛んなお前は  
相手が強者と知れば  
きつと  
追い掛けて来てしまう



だから



お前には  
少なくとも丸1日  
眠り続ける薬を盛り  
目覚めることの  
ないようにした



劣勢となった戦場へ  
お前が現れること  
などない

はずだった



閃光の如く  
現れたお前は  
有無を言わず  
彼女の兵を殺戮した



おかげで私は  
生き延びる羽目にな  
ってしまった



しかし  
それと同時に  
私を殺す相手は  
生涯ただ一人  
お前しかいないと  
確信した



情けなど  
掛けなければ  
よかった…

姉妹でありながら  
彼女は私が望む物を  
何でも掴み取って  
いくのだ





もしかすれば  
私が手に入れていた  
かもしれないのに




お前が  
島を出るその日も  
友同士で  
戦を行わぬよう  
約束させた

そう確信した途端  
何としても  
お前に生き延びて  
貰わねば  
ならなくなった


お前しかいない








あのとき  
私にできたのは  
私が育てた  
他の武器の矛先が  
お前に向くこと  
ないようにする  
ことだけ



春の訪れが  
お前を殺す


風は確かに  
そう告げていた



鳥を去るお前を  
見送るのは

哀しみで  
胸が張り裂ける  
ような  
気持ちだった





私を殺して  
欲しい

あのとき  
胸に秘めた思いを  
吐露すればよかった

せめて  
きつとまた  
戻って来るよう  
約束を取り付ければ  
よかった

そうすれば  
お前が去った島で  
胸が詰まる  
思いをせずに  
済んだかもしれない

しかし

私を殺す  
お前にだけ授けた  
必中の槍が  
この胸に届くことは  
なかった





予知通り  
お前はメイヴによって  
命を落とした



胸にぽっかり  
穴が開いた

私の胸に  
風穴を空けるのは  
お前だった  
はずなのに

別の穴が  
塞がらない



何もかもが  
空虚だ

影の国で生き続け  
なければならぬ  
その生の空虚さから  
逃れたくて  
死を望んでいた  
はずなのに

その  
僅かな希望すら  
潰えた



また  
誰も私を  
連れて逝っては  
くれなかった

誰もが私より  
先に死ぬ

お前だけでは  
ないさ



初めて見えた頃は皆  
かわいいかわいい子犬  
だったのに



瞬きのうちに  
老いさらばえて  
しまう

残される者の  
気も知らないで



ベッドで  
永久の眠りに着く

安心しきった  
顔をして



無責任にも  
後のことは  
全て任せたと行って

荷物だけを  
遺して逝く



そうやって誰もが  
私を置き去りにした



それを  
何百、何千と  
繰り返すのだ

何千、何万と  
私の元を訪れ

育ち

島を出て

やがて死ぬ

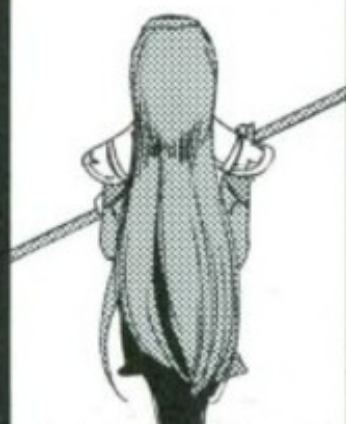
季節と同じ

人の死も  
時のサイクルの  
一部に過ぎない

ただ

私だけが  
そのサイクルから  
取りこぼされた

何かが  
おかしい





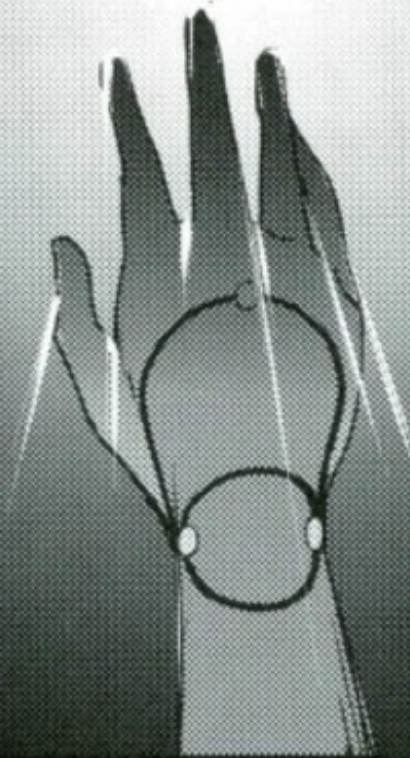
死の快樂を  
私だけが  
享受できぬ



誰でも良い

その安らぎの表情の  
先にあるものを  
教えて欲しい

死の先にある



光を


私は  
お前達の望むもの  
私を知りうることを  
全て教えた



なれば  
誰か一人で良い


私の望みを叶えて  
くれる者がいても  
良いではないか






そんな希望は  
胸の奥に  
仕舞い込んだ  
はずだったのに

お前が  
その門の取手に  
手をかけてしまった




まだ  
その橋の渡り方は  
教えていない

その門の開け方は  
教えていない



私は  
知らないんだ

この  
胸にある穴を  
どうやって  
埋めればいいのか



だが  
お前は  
知っている

教えていない



知っているの？



触ったなら  
あともう少し



そう

さうす  
うめがめさ  
ささ

そう  
なんだろう  
...?



答えろ







返事を……して



大切だった


何が  
いけなかったのか




大切に

大事に大事に  
してきたのに







オイフェを  
殺していれば  
よかったのか




メイヴを  
殺していれば  
よかったのか



島に入った若者を  
全員供物にして  
捧げれば  
よかったのか



お前に  
出会わなければ  
よかったのか



いくら  
胸に手を  
当ててみて  
も  
わからない

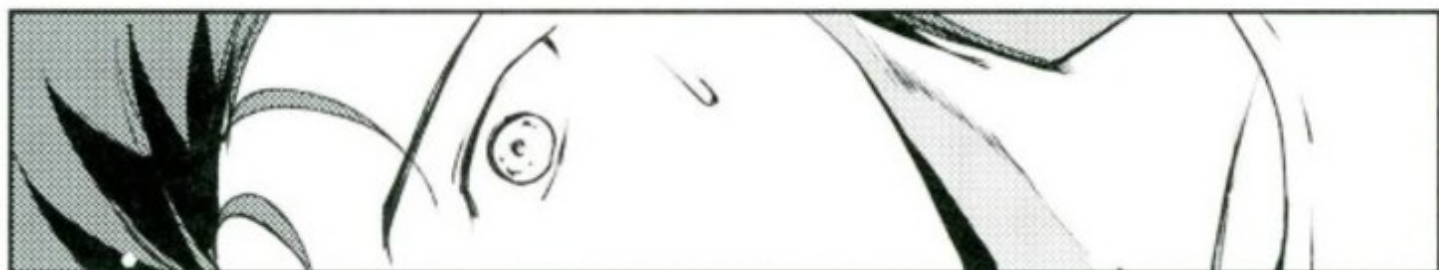


触ってみるか



ほら

あの日  
えぐられる  
思いをした  
この胸が  
今もなお  
えぐれているのが  
わかるだろうか？



ずっと  
空いたままだ







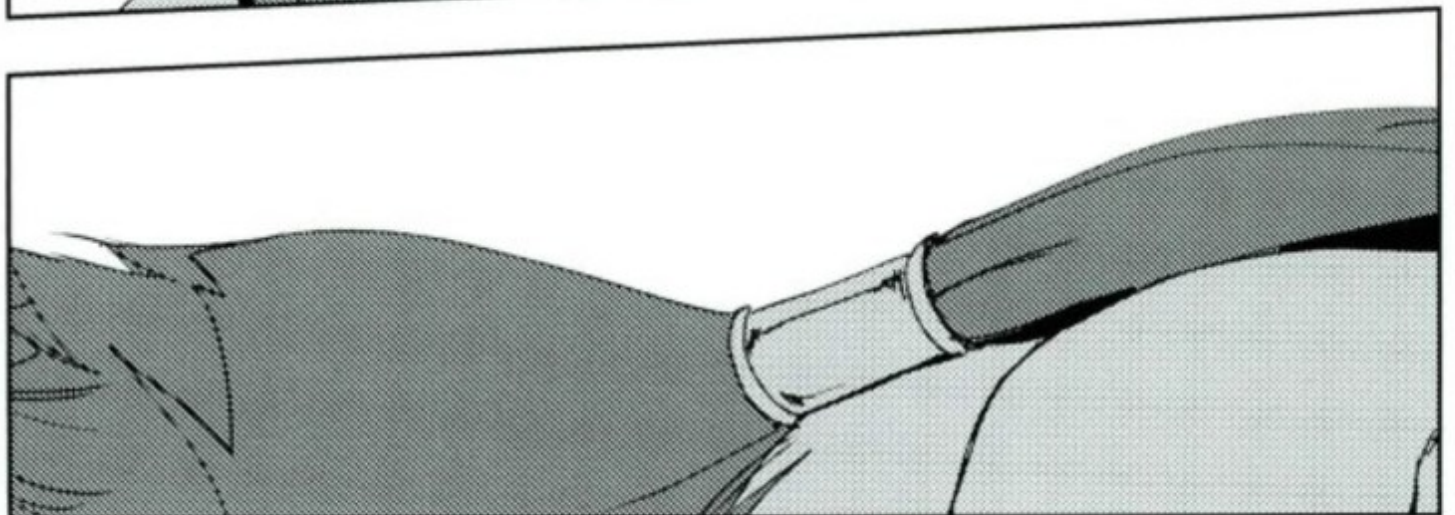
私を愛して  
欲しかった



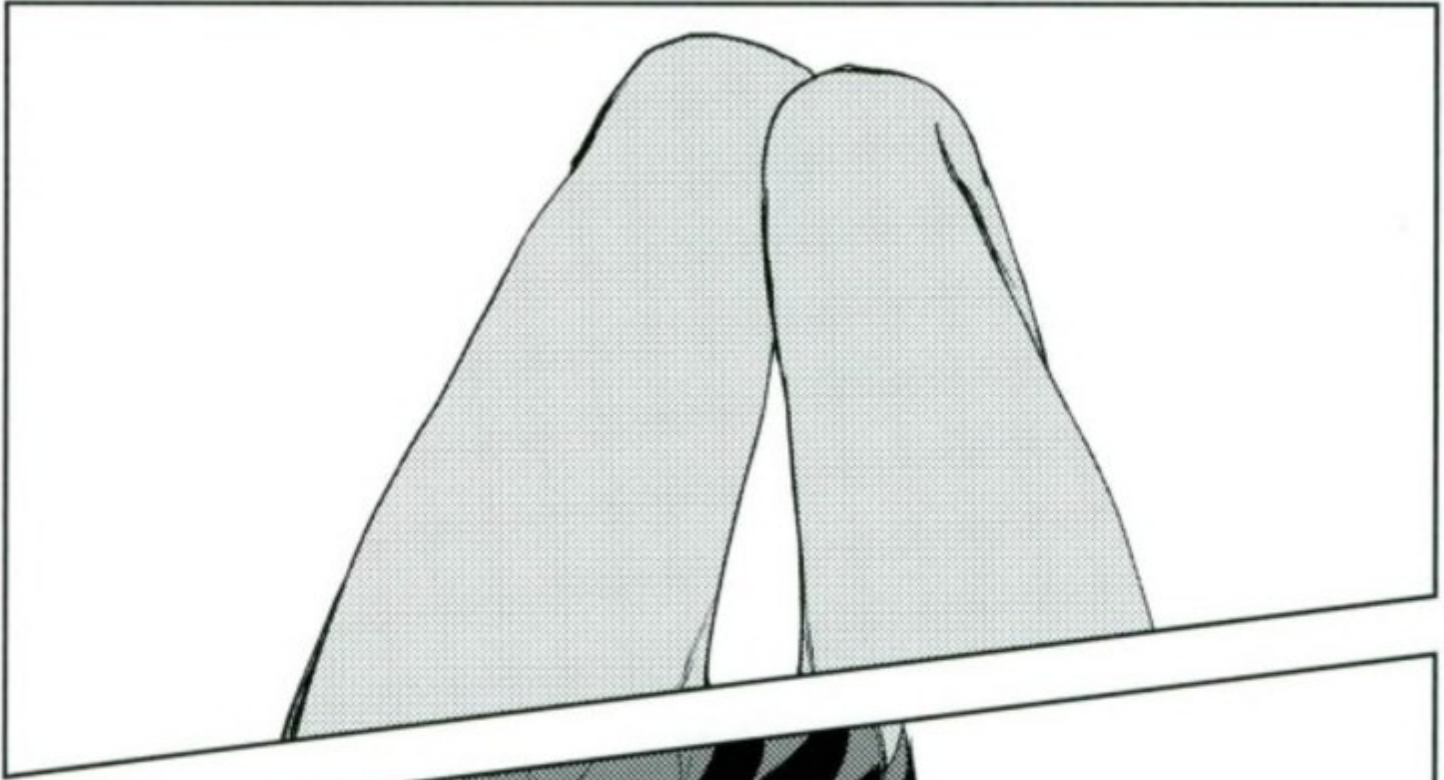




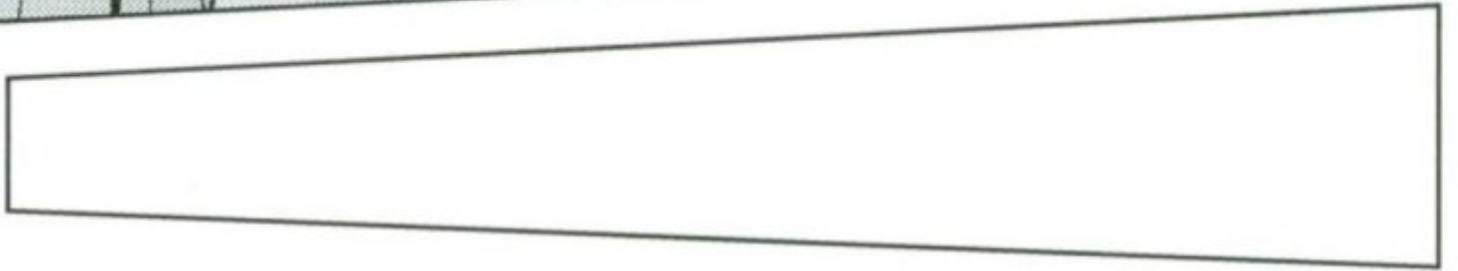




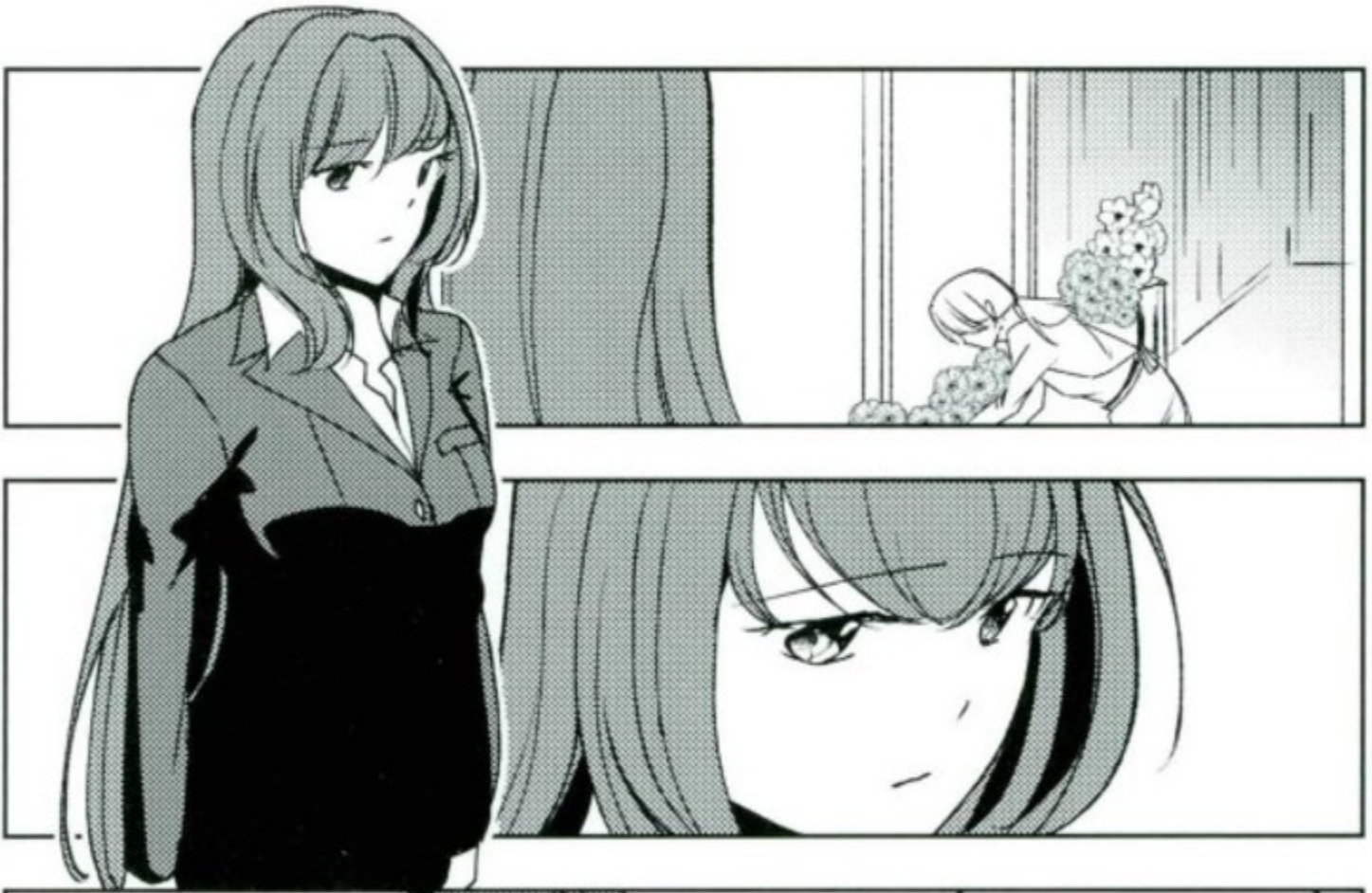








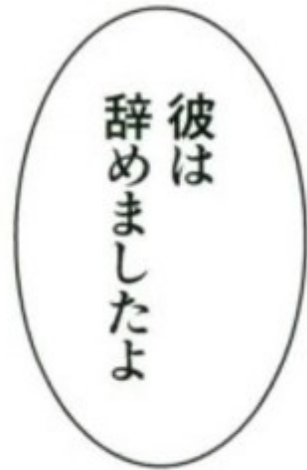




ああ

すみません  
このお店の  
店員の方で  
外国人の男性の方  
今日はお見えに  
なりませんか









申し訳  
ありません!



いえ  
彼に  
ひまわりが  
入荷したら  
連絡くれるよう  
お願いしていた  
ものですから

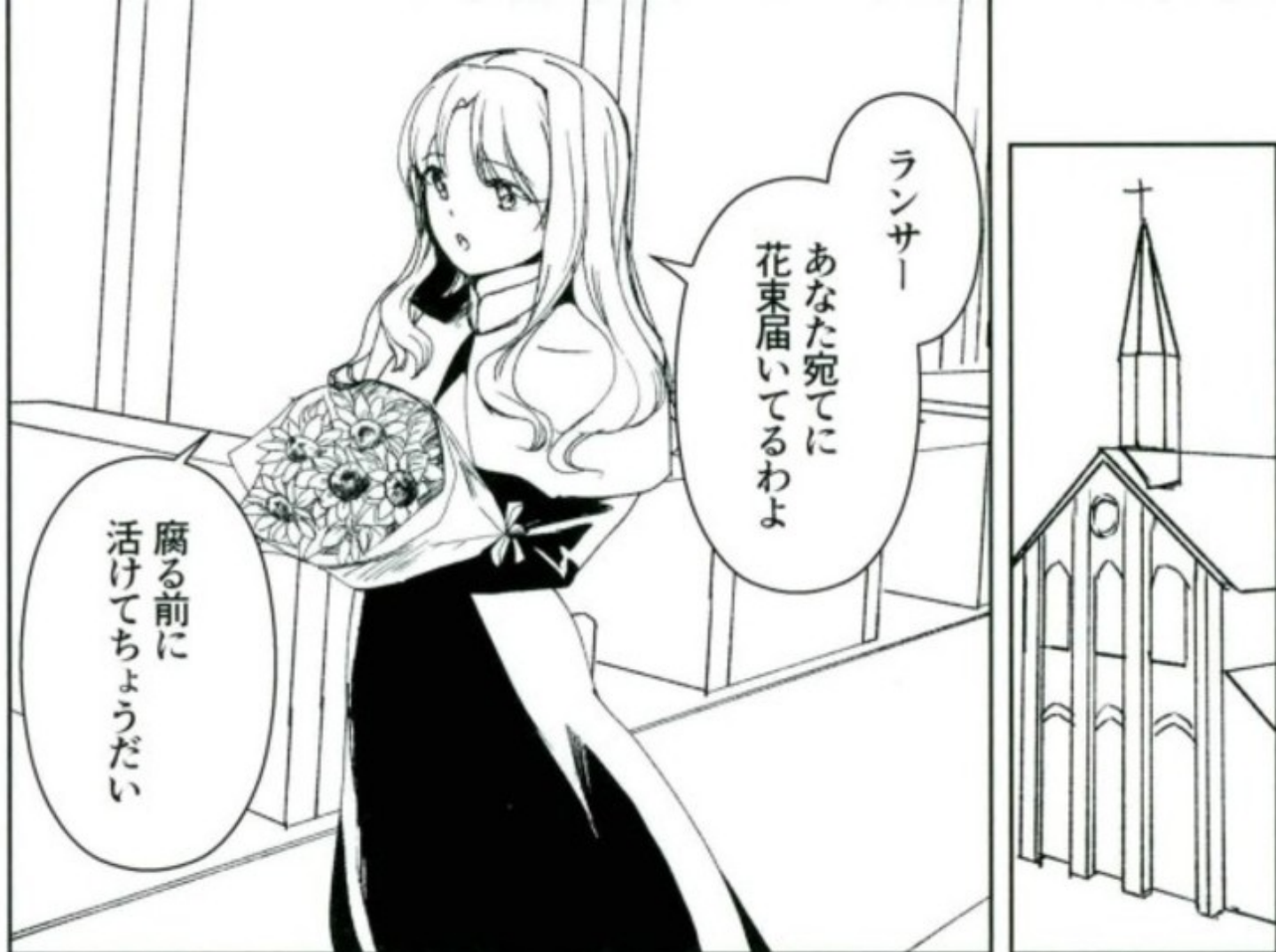


構いません  
急いでいたわけでは  
ないので



あの  
お願いしたい  
のですが...











ひまわりの  
花言葉は

「あなただけを  
見つめる」



こんなにたくさん  
ひまわりを  
送り付けて  
一体いくつの目で  
見つめてるん  
でしょうね

あるいは幾人の？



…さすが  
女難って恐いわね

え？  
あなたも一端…  
いえ…



僕だったら  
こんな花束  
恐くて置いて  
おけないです









かわいいんだよ







陰気な女王

2016.12.31